

東方靈歌録

梅池

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に迷い込んだ主人公が送る新たな日々。

「料理番をやってくれる?」

そう依頼した彼女の真意は何なのか?

彼と彼女たちとの出会いは一体何をもたらすのか……??

時系列は紅魔郷後の晩秋です

※評価・感想お待ちしています

目次

序章

前篇	～ 晩秋の幻想郷 ～	1
後篇	～ 信州の紅葉 ～	4
第1章	～ 異郷の少年 ～	
第1話	～ 幻想郷の迷子 ～	9
第2話	～ 生死の狭間 ～	15
第3話	～ 求められたもの ～	24
第4話	～ 料理番が宿す程度の能力？ ～	29
第2章	～ 冥界の桜、幻想郷の雪 ～	
第5話	～ 新たななる日常は好奇心と共に幕を閉じ… ～	37
第6話	～ 咲かせましょう ～	45
第7話	～ 花咲けど ～	51
第8話	～ 招かれざる客 ～	58
第9話	～ 桜下の決戦 ～	64
第10話	～ 冥土の妖桜 ～	70
第11話	～ 千年の記憶、千年の祈り ～	73

序章

前篇 晩秋の幻想郷

「冷えるわね……」

幻想郷。

現世から隔離された山里。この地には、冬の足音が聞こえつつあった。

博麗霊夢は、博麗神社で咲夜・藍の手を借り、宴会の準備をしていた。

「咲夜ー？」

「どうかしましたか？」

「蔵から酒持ってきて貰える？」

「わかりました」

紅霧異変から3ヶ月。紅魔館の人々（といっても5人と妖精しかないが）の存在も見慣れたものとなり、霊夢とレミリアも互いの家（館と神社か）を行き来する程度の仲になっていた。

「ねえ霊夢」

「なによレミ」

レミリアが霊夢に話しかけた……のだが、

（何なのよこの忙しい時に！）

ただでさえ紅魔館の面子が増えた分大事になっているのだ。そのあたり、咲夜が手伝ってくれるのは有難かった。

「あとどれ位かかるかしら？」

「何言ってるのよ。あと2、3時間はあるわよ？」

「そんなに？」

「まだ昼過ぎなのに、今から宴会始めてどうするのよ。宴会は夕方からよ。」

「むう……なら、仕方無いわね」

「どうやら大したことではなかったらしい……と思っていたら、続けてとんでもないことを言い出した。」

「咲夜、お茶にするわよ」

(……………えっ?)

霊夢はレミリアの言葉に驚きを隠せなかった。

「今『お茶にする』と言わなかった?確かに時間は丁度いいかもしれないけど、それなら何も神社でやらなくても…:というか、咲夜が行った蔵、結構離れてるからまだ戻ってこれるはずが…:」

「かしこまりました、お嬢様」

返答は一瞬で返ってきた。

「つて早っ!?!」

「あ、霊夢、酒ってこれでよかったかしら?」

「あ、ええ、ありがと…:つてか咲夜!」

「はい?」

「あんた蔵行ってくる時時間止めてたでしょ!」

「え、ええ…:遠かったので」

(そんなところだろうと思ったわよ、能力が能力だし)

霊夢は、咲夜の「時間を操る程度の能力」からだいたいの見当はついていた。

「まったく…:いい?咲夜」

「何でしょう?」

「弾幕ごっこしてない時に能力使うのは控えて頂戴」

「…:努力するわ」

「咲夜く?早くお茶にしましょう?」

「はい、ただちに」

そう言うや否や、咲夜はてきぱきと紅茶を淹れ、どこで用意したのかお茶菓子まで並べていた。そして1分と経たないうちに、

「咲夜。今日は何かしら?」

「はい。今日はキーン茶のストレートにスコーンを合わせてみました」

「へえ、美味しそうじゃない」

神社の軒下でティータイムを始めた。

「霊夢く貴方もどう?」

「私は今それどころじゃないのよ〜！」

そう言つて、霊夢は小走りに藍のいる厨房へ向かった。

「藍くそっちはどう？」

「あ、霊夢さん。こっちは大体終わりました。後は炒め物とかですしそういうのは直前にやつたほうがいいかと」

「ありがとう」

八雲 藍。 幻想郷を覆う博麗大結界の発案者の式……なのだが、普段主である八雲 紫があまり活動的ではないため、こうして単独行動することも多かった。

「そういえばさ、藍」

「はい？」

「紫は今日どうしてる？」

霊夢はふと気になって尋ねてみた。家で寝ているのだろうかと思っ
ていたのだが、

「紫様なら、今日は珍しく朝から出かけてます」

意外な答えが返ってきた。

「あの紫が？」

「はい。そろそろ冬眠の時期なので、その前に人界に行つてくると仰ってました」

「ふうん。いつ帰ってくるのかしら？ 今日には紫も勘定に入れて準備しているから、夕方までには帰ってきてほしいものだけど」

「さあ……でも、今日の宴会には行くつもりのようなので、じきに帰つてくるとおもいます」

「そう………それにしても、紫はどこへいったのかしら？」

霊夢がそういつてふと人里のほうを見たときだった。

「あら……」

「雪ですね……」

雪が舞い始めた。

「今年は結構雪が早いわね。強くならなければいいのだけど」

幻想郷に、冬の足音が聞こえ始めていた……

後篇 信州の紅葉

東京 立川。

朝を迎えた立川駅に、日光が射し込んできた。

僕は今、下りホームで電車を待っている。あと5分ぐらいで高尾行き
の電車がやってくるだろう。

ちなみに今は朝7時20分といったところだ。

立川でも木々が色づき始め、秋が深まりつつある。さすがに朝晩は
冷えるようになってきた。

それから待つこと5分。

——間もなく 5番線に 高尾行きが 参ります——

放送が入ると、オレンジ帯の電車が滑り込んできた。

早速ボタン式のドアを開けて中に入る……と、暑い。

どういうわけかわからないが、車内は暖かいを通り越してむしろ暑
いほど。

寒くなつてるとはいえ、もう少し暖房抑えてもいいのに。

僕を含めた十数人が乗り込むと、高尾行きはすぐに発車した。

立川から高尾まで、およそ20分。高尾で松本行きの鈍行に乗り換
え、目的地までさらに3時間ほど列車に揺られ、そこでバスに乗り換
えることになる。

のだが、今朝起床が早かったのでまだ眠い。ひとまず高尾までひと
眠り……

——間もなく終点 高尾 高尾 お出口は 左側です 大月、甲
府方面はお乗り換えです——

どうやらもう高尾らしい。次の列車まで乗り換え時間はわずか2
分。荷物を取りだしておかないと面倒なことになるから、先に出して
おかないと。

列車は左右に揺れながら高尾駅のホームに入った。幸いホームの
向かい側に連絡の松本行きが停まっている。僕が乗り込むと、少し音
を立てて列車は動き出した。

——ご乗車ありがとうございます。中央東線、普通松本行きで

す。相模湖、藤野、上野原の順に、終点松本まで各駅に停まってまいります。途中大月には8時25分、甲府9時26分、小淵沢10時7分、上諏訪10時47分、塩尻11時7分、終着 松本には11時24分到着の予定です。――

スピーカーから、高尾までとは変わり車掌による放送が入った。

座席に体を沈ませると、なんだか急に眠くなってきた。やっぱり朝が早かったからか？ま、上諏訪まで3時間はあるし、ひと眠りしてもいいか……

少年睡眠中……

――間もなく、上諏訪、上諏訪です。4分停車致します。出口は左側です――

おや？もう上諏訪か……？

まだ残る眠気を振り払って体を起こすと、列車はもう停車するところだった。

――上諏訪ー、上諏訪ー、ご購入ありがとうございますア上諏訪に到着です。1番線、到着の列車は普通松本行きです。――

しまった……確か次のバスの発車まであまり時間がなかったはず。しかも乗るバスは1本乗り遅れたら次は2、3時間後になってしまう……急がないと。

僕は慌てて列車を降りると、目の前にあつた改札を通り、駅前広場を見回した。すると、

――このバスは 横峰 経由 上田駅前 行きです――

よかった。バスはまだバス停に停まっていた。僕が急いでバスに乗ると、待っていたかのようにバスのドアが閉まり、発車した。

今日の目的地はこのバスで30分ほど山を上がった所にある高原。丁度紅葉の見ごろを迎え、諏訪湖と紅葉の競演が見られるはずだ。

今日は道路も空いているし、この分なら時間通りに高原までいける

だろう。

少年乗車中……

30分後。

——次は 横峰高原牧場 横峰高原牧場 です——

お。次が目的のバス停だ。ボタンを……

——次止まります バスが完全に止まるまで 立ち上がらない
てください——

誰かが押したみたいだ。車内には僕のほかに数人乗っているから、
誰かは分からないが多分近くの牧場観光の客だろうな。

山間のバス停に停まり、バスを降りると、後からもう二人降りてき
た。観光案内をあてにしているし諏訪湖観光のついでに来たという
感じだろうか。

バス停の目の前には大規模な観光牧場がある。だけど僕の目的は
こっちじゃない。

僕は農場に背を向け、森の小道に入っていく。森の中を少し進む
と、そこには……

「おお……」

広さは20m四方といったところかな。森の中のやや開けた場所
に着いた。紅葉が舞い、眼下に諏訪湖を見下ろす、観光案内などには
載らない絶景が広がっている。誰かが来るような場所でもないし、し
ばらく昼寝でも……

あれ？人がいる？

「……………」

いつのまにか、後ろに女性が立っている。いつの間に来たのか……
というか妙な格好だなあ。

ドレス（しかも紫色だ）を着て日傘をさしている……のは分かるけ
ど、イベントでもないのにそんな格好する人なんて見たことないぞ？

「……………」

女性はこちらをじつと見ている。

……何だろう。女性の姿に違和感を感じるな。無論奇妙な格好のせいでもあるんだろうけど、…どう表現したらいいのかな？何とにか…

人じゃ…ない？

よくわからない。話してみれば、何か分かるかなあ？

「……………うわっ!？」

……………痛ってえ。どこかの石につまづいたみたいだけど……
そんな石あったっけ？

「……………あれ?…」

ここどこだ？

さつきまで森の中にいたのに……なんで僕は丘の上にいるんだろう?
う?

足元にあるのは……彼岸花かな?

それに2〜30cm程度の石がごろごろしてる。こいつらに躓いたんだな多分。

「つくしよー!…」

……………寒い。

さつきまで無かった雪が降ってるし、やっぱりさつきまでとは違う場所なんだろうなあ。

「あら?…」

「はい?…」

誰か話しかけてきた。よかったこの近くに村でもあるんだろうなあ。

と、声のしたほうを向くと……………

「どうしたんだい。お前さんも暇潰しか？」

「……………ひっ」

そこには、さっきまでいたのとは違う人がいる……………んだけど。

「あの……………そこに置いてあるのって……………」

「ああ、これかい？鎌だけど。どうかした？」

「う、うわああああ!!!」

冗談じゃないって！こんなところで死にたくはないよ!?

僕は全速力で近くの森に駆け込んだ……………あちこちの石に転んだりもしたけど。

ここ妙に石多いなあ。

何とか森に入れた。もうあの鎌を持った人は振り切っただろう。

そう思うと、疲れがどつと吹き出したような気分になった。

こんな右も左もわからない場所で、生きられるのかなあ。

僕は、ちらちらと降る雪の中でそう考えずにはいられなかった

……………

第1章 異郷の少年
第1話 幻想郷の迷子

「はあ……………ふう」

やっとあの人を振り切った……………人というより死神のほう合ってる気もするけど。

それにしても……………ここどこだろう？

闇雲に逃げたせいでどこかわかんないぞ？

あたりに建物も見当たらないし……………

「とりあえず、歩くか……………」

こんなところでぼーつとしてても意味ないし。

……………あれ？荷物軽くなってないか？

何か落ちたのかな……………ちよつと確かめるか。

えーと、非常食に、水（あと1.5L程度かな）に……………あ。

まず服が無い。ほかに2,3日分持つてきてたんだけどなあ。

後無くなってるのは……………一応持つてきてたコンパスが無いくらいか。

そうなるのであるのが非常食・水・あと時刻表もあるな。こうなった以上時刻表要らないし、ここに置いてくか。

あとは充電器……………そうだ！携帯の電波は……………届いてないか。

歩くしかないか……………

少年迷走中……………

……あれから1時間ぐらい歩いてるけど、森の出口どころか人工物が何も見当たらないぞ？

まだ昼飯も食べてないんだよなあ。その辺の木の所で食べるか。

えーと、たしか食い物は鞆の底の方に……あつたあつた。食糧つつつても非常用の○ロリーメイト1箱だけど……無いよりはましだろ。

しかし広い森だなここ。この1時間まっすぐ歩き続けてたのに一向に出口が見つからない。

もう非常食もないし、あと1L強ある水が尽きたら死ぬしかないぞ？

早く森をでないと………ん？

前方……かなり遠いけど、明るくなってる？

もしかしたらあっちに行けば森を抜けられるかな？

ちよつと行ってみよう。抜けられなかったらまた歩けばいいし。

……あ。

抜けられた……のはいいけど、何も無いじゃん。

正面に山があるけど、この上に人がいるとは思えないし……時計回りに一周してみるか。人の手がかりがあればよし、無かったら……森の縁に沿って歩きますか。

少年探索中………

だいたい山を半周したかな？ここらで何か無かったらもう何か見つかることは無いだろうし……弱ったな。

雪は止んだけど、少し積もってるから道は見つけられないだろうなあ。

「……………ありや？」

地面に足跡が残ってる。

雪の上についてる……一筋しかないけど。

じゃあこの先に行けば少なくとも誰か人はいるんだろう。

でも反対側に村あるかも知れないんだよなあ。

どうしよう。

雪の上に一筋しか残ってないってことは、この人はどこか行くところかどこから帰るところだったんだろうけど……

流星石にどこか行くところじゃあないよなあ。僕もこんな天気で外出たくないし。

そうなると帰るところか……じゃ、これを辿れば村があるかなあ？

えーと、どっちに向かってるんだろ……左か。

あとどのくらい行ったら着くんだろ……やれやれ。

僕は紅葉を見に來ただけのはずなんだけどなあ。

あらら。このあたりは雪が積もってない。

だいたい2時間歩いてるから、降って無くてもおかしくはないけど、周りになにか……あ!?

石段がある！

これを上れば人里につけるかな？

とにかく上ろう。もうこれしか希望が無いし。

………きつい。

何段あるんだこの石段。

下はもうずっと遠くなってるし、上もようやく門に近づいたところ。

村じゃなくて寺か？当てが外れたなあ。

まあいいか。人がいるのは変わらないし。

………

やっと着いた。

誰かいるといいんだけど…

「ごめんください」「ドンドン

………

………

………あれ？

「ごめんください」「ドンドン

………

………え？

「誰かいませんか？」「ドンドン

………

………

………誰も、いない？

いやいや、あの足跡追ってきたんだから誰かいるでしょ普通！
まさか、もう人がいなくなってるなんてこと……ない、よな？
「誰かいませんかー？」 ギイイツ

……開いちやったぞおい。

ただの廃墟だったの？ここ。

にしてはきちんと手入れされてるみたいだし……

誰かいないと変なんだけどなあ。

……誰もいないのかなあ。もしそうなら今夜はその家で寝ることになるか？

でも、ほとんど唯一の望みが無くなって、この先どうすりゃいいんだろ……

ザザツ……

……！ 今後ろに誰かいる！でも、さっきまで誰もいなかったみたいなのに誰が？

「入ってくるなっ……！」

「え……があっ!？」

視界が回転していく。

無機質な冷たさが体を侵食していく。
何があつたのかまったくわからなかつた。

誰……………が……………

そして、視界が闇に覆われていった……………

第2話 生死の狭間

「しまった……」

ここまで来るような人間がいるからとりあえず斬ってみただけ、何かあって白玉楼に迷いこんだだけみたいね……

今のをまともに受けて倒れて……死んではいけないよね。思ったより厚着してたのかしら？

でも……流れてる血の量をみる限りじき死ぬみたいね。

これは面倒な事になりそう。ここで死人が出たなんてことがわかったらあつちが黙ってないでしょうし……

「妖夢、どうかした？」

「あ……幽々子様、実は……その……」

「どうかした？」

「……先ほど、生きた人がここに入りこんでいて……それでとりあえず斬ってみたら倒れて……じき死ぬと思えますけど……どうしましょう？」

「……………」

「ゆ、幽々子様？」

「『とりあえず』で斬られた方に心から同情したくなるわね」

「す、すみません……」

「まあやったものは仕方ないし、これからどうするかよ。ここで人が死んだとなればあちこち面倒なことになるし……妖夢。これまだ死んではいけないのよね？」

「……はい。死ぬのも時間の問題ですけど……それがどうかありませんか？」

「なら、どうにかなるかも知れないわね。妖夢、たしかこの前妙な薬貰ってたわよね？」

「はい……『どんな傷もすぐ治す』なんて触れ込みでしたけど、あんなので治すつもりですか？」

「何もしなくてもどうせ死ぬのだから効かなくても構わないのよ。私は準備があるから早く持ってきてくれる?」
「わかりました」

……幽々子様はああ言っていたけれど、一体どうなさるおつもりなのかしら?

「死を操る程度の能力」ではさつさと死なせることしかできないし……

仮にあの薬が効いたところで多分魂の方が留まれないし……あ、あつたあつた。」

「幽々子様、薬持って……って何してるんですか?」

「ああこれ?ちよつと能力を応用させてこいつの『死』を妨げてるの。こうすれば一部は死霊化するでしょうけど、魂の核は体に封じられたまま出られない、というわけ。」

「なるほど……」

「でも思つたより余裕がなさそうなのよ。もう魂が7割方出てきているから早くしましょう?」

「わかりました。」

……薬液を患部に直接かけて……10秒ほどで治ります?そんなことあるわけが……あら?」

「とんでもない薬ね。もう跡も無いじゃない。」

私が斬つたところは傷痕も残さずに完治していた。

一体どうやっているのかしら?私には関係ないけど少し気になります……そのうち薬押し付けてきた兎に聞いてみるとしましょう。

「あとはこの霊だけ……戻すのも面倒だからこのままこれに取り憑かせちゃいましょ」

「ゆ、幽々子様……そんなことして大丈夫なんですか?」

「大丈夫よ？魂が同じ器についてれば内も外も変わらないの。半分人外になるけど死ぬよりはましだから気にしなくていいのよ。」

「まあ…言われてみれば確かにそうですね。」

「じゃ、さっさとやるわよ。」

「……………はい、おしまい。空いてる部屋に寝かせておきましょう。」

「そうですね。」

客間に床を敷き、人（幽々子様曰く半分人外）を横にさせた。

改めて見てみると、何もできそうにないくらい細い人ですね……身長は私より少し高い程度かしら。

「妖夢く？その子あと数時間はそのままだし夕食にしちやいまして？流石に疲れたわく」

「はい。ただいま」

「……………当分目覚める様子もないし、ひとまず放っておきますか。今夜は何かしら……………」

「幽々子様く？夕食の用意が」

「お疲れ様。今日は何かしら？」

「…そこでしたか。」

相変わらず食にこだわる方です…

そこが幽々子様の美点なのですけど。

「今日は鮭のみぞれ煮だそうですね」

「へえ。期待できそうですね」

「はい。………って幽々子様?!」

あつというまに行ってしまった……

—夕食後—

「さて、そろそろかしらね。ちよつと様子見にいきましょうか」

「はい。…流石にもうしばらくかかるのでは?」

「んーどうかしらねー?」

もし幽々子様の言うとおりなら、尚のことあの薬の効果が気になります……

「さて、どうかしら……あらっ…お目覚めのようね
「…？幽々子様？……あら。」

幽々子様の後から客間に入ると、そこには……

「……………？…？？」

訳が分からないといった風情の少年がいたのです。



……………

……………

……………？

あれ…？

身体感覚が……ある？

何故？

僕は死んだはずじゃあ……………

「お目覚めのようね」

話しかけられた方向を向く。するとそこには、2人の少女とそのまわりを舞う幽霊の群れが見えた。

……………

ええと……………

……………うん。

やっぱり死んでるみたいだ。

その人達は冥土の渡し守と奪衣婆ってところか。「婆」なんて呼ぶような外見してないけど……………

「ねえ、貴方？」

「はい？」

「貴方がどうしてここにいるのかわかるかしら？」

「……死んだから……では？」

「…違うわね。貴方はまだ生きている」

「…えっ？じゃあ何故そこに幽霊が？」

「……それに答える前に、貴方の現状を話しておきましょうか。」

「現状？」

「そうよ。貴方、ここが何処かわかっていないでしょう？」

「それは……まあ」

「……ここが何処かわからないのも確かだし……」

「ここは白玉楼よ。幽霊たちがいるのは、此処が冥界に存在するから」

「……冥界？」

「そうなのよ。で、貴方に聞きたいんだけど、貴方どうやってここま
で来たのかしら？」

「どうやって……迷ってたところに足跡見つけて辿ってきたらここに
着いたんですけど。」

「そう……それは妙な話ね」

「どこがですか？」

「……この冥界は、幻想郷と結界で隔離されているの。生きた人間が来
れるようなじ場所じゃないのよ。」

「幻想…郷？」

「そう。幻想郷。人々から忘れ去られたものが辿り着く里。」

「……だめだ。話がさっぱりわからない。」

「貴方……もしかして幻想郷の外から？」

「幻想郷なんて場所に心当たりはないんでね」

「そう……となると、説明が少し面倒ね」

「面倒？」

「貴方の横に霊がいるでしょう？」

「ん？…ああこれか？」

全く気づかなかった。

「これが何かするの？」

「それ貴方の魂なのよね」

「……………はい？」

「それ貴方の霊魂なのよ。」

「……………やっぱり死んでるんじゃない？」

「それで全部じゃないのよ？2と3割は残っているはずだから」

「……………ああ言い忘れてたわ。さっきはごめんなさい」

「……………何が？」

「何って…この子が貴方を斬ったのよ」

そう言って後ろの娘を示した。

入ってきた時から硬くなっていたのはそういう訳か。

「ところで貴方」

「はい？」

「これからどうするの？元の場所に行くのは難しいけど」

「……………」

見覚えのない場所に来た時から予感はしていたけど、戻るのは無理……………か。

「なら、しばらく厄介になっても？他に行くあてもないし」「いいわよ。」

「…よろしいのですか？」

「いいじゃない。原因作ってるんだし、ね？」

「まあ…幽々子様がそうおっしゃるなら…」

「…じゃあ、お世話になる……………っと、そういや自己紹介もしてなかったか」

「そういえばそうね。私は西行寺 幽々子。こっちは魂魄 妖夢」

「僕は冷泉 清貞。冷泉で構わない」

「じゃあよろしく。冷泉」

「こちらこそ」

こうして、僕は人ならざる者として生きることになった。

第3話 く求められたものく

「冷泉くそっちはどう?」

「もうすぐ終わります。」

「じゃあ終わったからお昼にしましょ。」

「わかりました。」

あれから3日が経った。

最初は霊の扱いに慣れなかったけど、どうも乗れそうだったので今は霊に乗って空中移動をしている。

で、今はというと……………

屋根の修繕中である。

幽々子様、斬られて3日の人間に何させるんだか……人使いが荒い。

さて、ここも終わり……つと。

お昼にするか。

〈昼食中〉

「冷泉」

「何です?」

「貴方、料理なんてできたりする?」

「一応できますけど……どうかしました?」

「幽々子様……まさかあれをやらせるおつもりですか?」

「いいじゃない。もともとまとめ役が欲しいとは聞いていたし。」

……まとめ役?

「幽々子様、……僕に一体何をさせよう?」

「別に大したことじゃないのよ? 貴方にこの料理番でやってもらうかと思ってるの。」

「……ゆ、幽々子様? 今何と?」

「あ、料理番といつてもたいしたことじゃないのよ? 普段はいいんだけど、何かあった時のためにまとめ役が欲しいって言われてたのよ。」

「でも……料理ができるといっても、僕なんかまだ見習いの域ですし……」

「そうは言っても、貴方しか頼める人がいないのよ。別に食事を作

れって訳じゃないし……それに、貴方がここにいるなら、何かしらやっ
てもらおうとは思っていたのよ？それが料理番だった、というだけ
で。」

「………わかりました。幽々子様。やれるだけやってみましょう。」
「助かるわ。後で厨房に案内するから。」

〜1時間後〜

「はい。ここが厨房よ」

「へえ………って、人はいないんですか？」

「ああそれ？じきにわかるわよ。皆―ご注文のまとめ役よ―」

「僕は物ですか!？」

と、その時。

(……ほう、あんたか)

(この前迷い込んでた人やっけ?)

(こっちの声……解らないんでねえの?)

「……………ん？」

誰だ今の。3人ほど話しかけてきたような気もするけど、聞こえる
というより頭に響いてきたような……

「何だ今の、とでも言いたそうね。」

「ゆ、幽々子様………?何故おわかりに？」

「大したことじゃないのよ?妖夢も最初会った時はそんな反応してた
し。」

「……なるほど。………で、結局今のは何だったのですか？」

「あれはこの料理人たちよ。ほら、前にいるじゃない。」

「ま、前って……この霊たちのことですか？」

前をよく見てみると、確かに霊が3つ見えた。

まさか料理人が霊だったとは……ここは変わってるものだ。

「そうよ。じゃ、いろいろやることあるでしょうから、私はこれで失礼するわよ」

「え？」

(……行ってしまったか。)

(まあしゃーないやろ。あの方いつもあの調子やから。)

(まあ幽々子様はええとして、とりあえずこつちが先でねえかい?)

(それもそうだな。……ふむ、名は何といつたかな?)

「……………ああ僕ですか?僕は冷泉 清貞です。まあ冷泉とでも呼んでください」

(そうか。これからよろしく頼む)

「こちらこそ。」

(よかったわあ。これで料理の組み立てに苦労せんでよくなるし。)

「そうはいつでも殆ど経験ないんですけどね……頑張ります。」

(まあ構わんべ。初経験をおそれちゃあ何もできんべ?)

「それもそうか。……ところで、君たちの名前は？」

(……………名前、か…………)

(そーいやあらへんな、そんなもの。無くても区別できるで。)

「いや名前無いと僕が呼べないんですけど……」

(したつけ適当に名前つけてもらえばよかんべ?)

(ええんとちやう?結局冷泉はんが呼べればええ話やから。)

(それもそうだな。……では、私達に名をつけてはくれぬか?)

「そりやまあ、構いませんけど……」

……じゃあ、まず、厳つい話し方してる方は「大路」、あとそちらの二人がそれぞれ「浪速なにか」と「下野」……………で、どうです?」

(いいんでねえかい?)

(私は「大路」というわけか。まあよかろう。)

(でうちが「浪速」っちゆうわけか。まあええんとちやう?)

「じゃあ、そういうことで。これからよろしくお願いします」

(よろしく頼む。)

(よろしゅうな。)

(えろえろよろしく。)

こうして、僕は冥界こゝこでの役目を負うことになった。

第4話

く料理番が宿す程度の能力?く

(冷泉はん今晚どないするん?)

「うーん…鯖は揚げびたしにして、あとは適当にあわせていきましようか。」

(了解。ほなネギと舞茸取ってきてくれん?)

「わかった。」

白玉楼の料理番となつてから1週間。

ようやく献立の組み立てにも慣れてきた…:…のはいいのだけど。なんで海が見当たらないのに鯖があるんだろう…:…

買い出しに行つてきた妖夢曰く「商店で安かった」そうだけど。やっぱり、向こうにいた時の常識が通用しないなあ。

もう「幻想郷」はこういうものだつて考えたほうがいいか。

「えーつとネギと舞茸ネギと舞茸…:…」

あつたあつた。

僕より他の皆の方が料理上手いから僕が雑用やつてるけど、いつかは僕も腕を上げたいなあ。

「冷泉く?」

「幽々子様?…どうかなさいました?」

「ちよつと話があるから夕食後残つて欲しいのよ。」

「わかりました。」

…幽々様の話?…一体何だろう?…

く夕食後く

「ぐちそうさまでした。」

「ぐちそうさま。」

「お粗末様でした。……ところで、話つてのは何ですか？」
「うーん……ここじゃちよつとやりにくいから中庭にいきましょう。」

中庭？ここじゃあできない話つて……幽々子様は何をしようとして
いるんだろう？

—中庭—

「幽々子様、中庭じゃないとできない話つて何ですか？」

「ええ。話というのは、貴方の『能力』を見極めたかったのよ。」

「…能力、ですか？」

「そうよ。外界の人間が『能力』を持つのはまれなんだけど、外界から
自力で冥界まで来るなら、何かしら能力を持っていてもおかしくは無
い筈よ？」

「でも、僕は『能力』なんて代物、使った覚えがないんですけど？」

「貴方が『能力』に気づいてないかもしれないし、それに『能力』は先
天的に得るものだけではないわ。」

「そんなもんですかね？」

「そんなもんよ。一度試してみなさいな。」

「まあやつてはみますけど……何をすればいいんです？」

「そうねえ…貴方の正面に向けて意識を集中させてみて？」

「正面……正面……」

僕が正面に意識を傾けた瞬間。

「…これは？」

「どうかしたの？」

「なんだか前に壁があるような感覚がするんですけど…」

「壁ですって？」

「冷泉、いくらなんでもそんなもの…あ、あれ？」

「妖夢、どうしたの？」

「幽々子様…冷泉の前…その、何というか…：…見えない壁、というか…その、と、通れないんですけど？」

「そこまで怖がらなくても…あら？確かに壁があるみたいね。」

「…本当に、そんな物が？」

「そうなんだけどねえ。これどうとっいたらいいのかしら…：…冷泉、今度はそこに落ちてる葉をイメージしてみてください？」

「葉…ですか？構いませんけど。」

訳も分からぬまま、僕が葉っぱのイメージを前に籠めた。

その直後。

「あら。今度は葉が浮いてるみたいな感触ね。」

「ゆ、幽々子様…どうなってるんですか？少し…：…その…怖いんですけど。」

「だから怖がらなくていいわよ。多分これが冷泉の『能力』でしょうから」

「これが僕の『能力』ですか？そんな壁と葉らしきものしか作れないのがですか？」

「そう悲観することもないわよ。多分、貴方のイメージさえ確立できているれば、何でも生み出せるはずよ。そうねえ、さしずめ『不可視の物体を生み出す程度の能力』といったところかしら？ふふ、面白そうな能力ね。」

「イメージって…なら最初に作ったあの壁は何だったんです？僕何もイメージしてなかったんですけど…」

「あの壁ねえ…『能力』の基になっている過去の記憶の類じゃないかしら？」

「過去…！」

僕の過去。

その中に見えない壁なんてものに関わるようなことが一つだけあ

る。

「でも……なんで…」

あの時のことはもう忘れたつもりでいたのに。

あの時のことにはもう二度と関わるつもりはなかったのに。

なのに……

何故今更、しかもこんな形で現れるのか。

何故………

何故………!!

「…泉？冷泉!？」

「?……妖夢……?…どうした?」

「どうしたって……それはこっちのセリフだすよ……急に顔色変えてどうしたんですか?」

「い、いや……」

「その『能力』の源……あまりいい記憶じゃないみたいね。」

「…はい。僕はもう忘れたつもりでいたんですけど……」

「記憶なんて、そう簡単に捨てられるような代物じゃないわ。それこそ、一回死ぬぐらいしないと……ね。」

「…過去から逃れることはできない、ということですか。」

「そういうことよ。さ、次いきましょ。」

…あれ？

「幽々子様、僕の能力を見たかったのではないのですか？」

「勿論それもあるわよ？でも『能力』を扱えるとわかったからには弾幕ごっこのやり方も教えておきたいのよ。」

「弾幕ごっこ…ですか？」

「ええ。この幻想郷一帯で用いられる決闘の手段。昔は普通に戦っていたけれど、死者が出るのを防ぐために弾幕ごっこことスペルカードルールが制定されたの。」

「……はあ。」

「やり方自体は簡単だからやってみなさいな。」

「どうやるんですか？」

「自分の中の霊気を形にして打ち出すだけよ？」

「それ絶対『だけ』じゃないですよね!？」

幽々子様…さも簡単そうに言いますが、どう考えても難題ですよ
ね？

少年練習中……

「……ふう」

「上手いじゃない。これならある程度は実戦で通用すると思うわよ？」

「確かに撃つだけなら簡単でしたけど……」

　　僕自身意外なことに、弾を撃つだけなら5分程度で出来た。

　　けど、こうやって実用レベルになるまで1時間は確実にかかっているんだよなあ。

「じゃあ後はスペルカードかしら。妖夢、確か余ってるのあった筈よね？」

「はい。こちらに。」

　　そうやって妖夢が差し出してきたのは、何も書かれていない5枚のお札だった。

「これをどうするのですか？」

「適当に念じればいいんじゃないかしら？」

「そう言われましても……」

　　よくわからないまま札を手取る。すると、

「うお？」

　　仄かな光と共にお札に何やら文字が浮かび上がってきた。

「それが貴方のスペルよ。使う時は札を掲げてスペルを宣言すれば発動するわ。」

「これが……スペル……」

5枚のお札を眺めてみると、それぞれ

防符 「不可視の障壁」

反射 「リフレクソロジীর応用」

鏡符 「無際限の魔鏡」

炎符 「火焰乱舞」

狂気 「見えざる災厄」

と記されていた。

一度試してみたいけど、どうなるかわからないしその内妖夢に教えてもらおうかなあ。

「夜も更けてきたし、今日はもうここまでにしませうか。」

「はい。幽々子様。」

「冷泉く明日の朝もよろしくね〜」

「かしこまりました。おやすみなさいませ。」

僕に一声かけると、幽々子様はそのまま寝室へ向かわれた。

後には僕と妖夢だけが残された。

「私達も寝ませうか。」

「そうですね。」

「それではおやすみなさい。」

「あ、あの…」

「?どうしたんですか?」

「いや、妖夢にそのうちまた練習に付き合ってもらえないかなと思っ
て……駄目かな?」

「そういうことなら構いませんよ。でも、覚悟しておいてくださいね
?」

そう言うと、妖夢は意味ありげな笑みを向けてくる。僕は、

「…お手柔らかに頼みますよ？」

こう返すことしかできなかつた。

第2章 冥界の桜、幻想郷の雪

第5話 新たな日常は好奇心と共に幕を閉じ…

早朝。

僕の日課は、夜明け前の井戸で水を汲むことから始まる…

「…つくしよいつー…う…」

季節は冬。

もう1、2ヶ月もすればふたたび芽吹き新时期となる…が。

「寒…うう」

同時に1年で最も冷え込む時期でもある。

（冷泉、お前え大丈夫か？）

「大丈夫だよ…今日はかなり冷えるし、まあ仕方ないでしょ…多分」

下野の心配ももつともかもなあ。幽霊が風邪をひくなんて話聞かないから風邪にいいものがあるか分からないし。

（ま、お前えがええつちゆうんならしゃああんめ。それより早くもつていかにやならんべ？）

「ああ。早く済ませようか。」

向こうには水道があつたが、こちらにはそんな便利な物は無く、精々井戸ポンプがある程度。でも、手作業で桶を上げ下ろしするよりは楽なんだし、前向きにとらえた方がいいよなあ。

レバーを下ろす。

レバーを上げる。

下ろす。上げる。下ろす……と、単調な作業を40回ほど繰り返すと、持ってきた5個の甕が一杯になる。

「こんなところかな。じゃ、持っていこうか。」

(はいよ。)

5個の甕の内2個を半霊に乗せ、2個を天秤棒で担ぎ、残るひとつを霊達のうち誰かに持ってもらおう。

そうして汲み上げた水を1日分の生活用水に使っていくのだ。

掃除洗濯などにもこの水を使うため、総量は100L近くにもなる。

夜明け過ぎ。

空が明るくなるにつれて厨房も忙しくなっていく。

(冷泉、この甕どうする?)

「あ、それは今晚の鍋に使うので下拵えだけお願いします」

(冷泉今晚もええけど早いと朝食取りかからんと間に合わんで!)

「え……あ。」

言われて外を見ると、もう日が昇り切っていた。この時期だから……あと1時間ぐらいで朝食の筈だ。これは急がないとまにあわないだろうなあ。

「よし、じゃあ早く終わらせるとしようか。」

(おう！)

(まかしとぎ！)

(任せろ。)

朝食の時間まで1時間と少し。

今日は鯀の塩焼きに合わせていこうかなあ……

「ごちそうさま」

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした。ではこちら失礼致します。」

朝食後。

まずは3人分の食器類を手早く洗っておく。

作る時は1時間近くかかっても、洗う時はものの15分で済んでしまう。……いや、3人分の朝食で15分って長くないか？ 幽々子様結構食べられるから、そのせいなのかなあ。

そんなことを考えながら洗い終え、棚に差しておく。多分そろそろ……

「冷泉くそっち終わりました？」 ガラガラ

「今行くから待ってー。」

最近はず前中妖夢が暇らしい。

そのため、最近はこの時間に練習に付き合ってもらっている。

く中庭く

「じゃあ、いいですかー？」

「いつでも大丈夫ー。」

妖夢と20mほど距離をとる。最近はこの距離から適当にスペルを撃って僕がそれを避けることが多い。

「では…畜趣剣『無為無策の冥罰』！」

スペル宣言と共に妖夢が右から左へと動く。するとその後十数本の予告線が引かれ、少しすると予告線の両端から大量の弾幕が打ち出される。一度練習に使われているので、前後から弾幕に挟まれるような大きく下がって弾幕に備える。直後、僕の目の前から弾幕が飛んで行って…

「これなら…！」

弾幕が襲いかかってきた。けれども半分は僕から違う方向に飛んでいき、残りもやや隙間が多い。これなら余裕を持って避けられる……筈だ。

「はっ……やっ……つと」

乗っている霊を操り弾幕の間をすり抜けた。

その瞬間だった。

「まだ読みが甘いですね…」

弾幕を抜けた先にあつたのは、次の予告線だった。

「やばっ……………」

もう、予告線の外に出る暇もなかった。

「あーもう今の罨かあ痛たたたたた！」

今度は回避する隙間もないほどの密度で弾幕が飛んできた。当然のように立て続けに被弾してしまう。

「うううう」

「目の前の弾幕を避けるのに集中しすぎですよ。もう少し周りを見ないと被弾しちゃいますよ？」

「そうは言っても目の前の弾幕避けないことには……………」

「…やっぱり、この辺の感覚は経験が関わりますからね。もう一回やりましょうか。」

「もう…一回？」

「早くしないとまた被弾しますよ？」

「え…ちよつと待って」

「獄界剣『二百由旬の一閃』！」

「うわああああああ!!」

……………

1時間後。

「むぎゅ〜……………」

「…持久力つけた方がいいんじゃないですか？」
「妖夢の特訓がハードなだけだつて絶対……」

実際、僕はこの1時間ほどで20回近く妖夢のスペルを受けている。

そして、僕はそのスペルを一度も避けきれなかった。

「やっぱり弾幕使わないと避けきれないんじゃないや……」

「駄目ですよ？弾幕撃つのも結構力を消耗するんですから、相殺ばかりしていたら実戦でもちませんし。」

「うう………」

僕と妖夢も素で会話するようになって結構経つけど(妖夢は素であの口調らしい)、弾幕のこととなるとかなわないんだよなあ。

「あ、そろそろ昼食の準備しないといけないのでは？」

「あ、もうこんな時間か。」

(冷泉く？どこにおんねやまつたく……)

「今行くー。」

「今日も期待してますからねー」

妖夢の声を背に厨房へと急ぐ。

昼食……どうしようかなあ………

昼食中。

今日は親子丼にアレンジを加えたものだ。

「~~~~~♪」

「美味しいですね。アレンジもいいんですけど………一体何入れたんですか？」

「それは秘密ってことで……」

「変わった醤油を使っているのかしら？何かまではわからないけれど。」

「そうなんですか？」

「…そんなあつさり解るものじゃないんですけどねえ……」

実を言うと、ほんの少しだけ魚醤（しょつたる鍋に使われるもの）を加えている……けど。

幽々子様にすぐ看破されてしまった。

こうなったらもう少し別のものも入れて……

「それはそうと、あなた方」

「はい？」「何でしょう？」

「この後少しいてきてもらえるかしら？」

「わかりました」

………一体何だろう？

昼食後。

「こつちよ〜」

幽々子様について庭まできちやっただけ………ここ何かあったっけ？

桜ならいくらでもあるけど……

「あ、あった。これよこれ」

そういつて幽々子様がひとときわ大きな桜を指さす。

「幽々子様…その木がどうかしたのですか？」

「この桜ね、何か封印しているせいでここ数百年一度も花がさいていないのよ。」

そして。

「だから、その封印を破って、この木…『西行妖』を満開にさせてみたいの。」

「かしこまりました。」

「了解、です。」

この一幕が、後に幻想郷を巻き込む異変の始まりであることなど、僕は知る由もなかった……………

第6話 く咲かせましょう

「ところで幽々子様、どうやって花を咲かせるので？」
「それなんだけど」

そこで一度言葉を切り、一呼吸置いたのちに。

「西行妖を咲かせるには、封印を打ち破る必要があるの。だから……
幻想郷の『春』を全部持ってきてちょうだい。」

「……それでは幻想郷に春が来なくなるのでは？」

「勿論満開になったら戻すわ。そうすれば少し冬が長引いた程度で済む筈よ。」

「…なるほど。」

それなら多分大丈夫だろう。

「じゃあそういうことで。妖夢？」

「はい？」

「里に買い出し行くついでに春を回収しておいてね、冷泉使ってもいいから……そうね、ついでに服も見繕ってね、作業着以外駄目になってるんじゃない？」

「いい加減パッチワークだらけですね。」

「やっぱりね、誰のせいかしらね？」ニヤニヤ

…幽々子様それを言ったら……

「そ、それは……その……」

妖夢が赤面している……あの時、僕の荷物と服ごと問答無用で斬ってきたからなあ。腕はあるのにどこか抜けてるんだよな……最近そこが可愛いと思ってるのはちよつとした秘密だけだ。

「は、早く行きますよー！」

「うわっ、ちよ、ちよつと待ってってば！」

こうして僕は、あの日以来初めて冥界の外に連れ出された。

—人里—

「これなんかどうです？」

「…ちよつと派手すぎない？それ」

「じゃあこっちは？」

「んーそっちは…」

妖夢の手には、柿色とやや青みがかった灰色の服があった。

柿色もいいとは思うんだけど…

「そっちの灰色にするか。」

「そうですね。じゃああとはこれに合わせて羽織でもつてところですか。」

「羽織かあ…」

灰色に合わせるとすると……どうしたものだろう。

「色がなーどうしたものか…」

赤系が会いそうではあるけど、あまり鮮やかな色だと下が地味な色合いだし浮くような気が……

「あ、……こんなのはどうでしょう？」

そう言った妖夢の手には、相当暗い赤色の羽織があった。

「へえ…丁度あいそうだしこれにしよう。」

「そうしましょうか。」

そう言つて、妖夢は勘定を済ませに行つてしまった。

……しかし、妙なことになったと改めて思う。半年前には異世界で僕を斬つた少女と服を買いに行くことになるなんて考えもしなかつたよなあ。

「またどうぞー」

……お。どうやら終わったらしい。

「じゃあ行きましょうか。」

「はいよ」

妖夢と共に店を出る。次はどうするんだろ…？

「妖夢、次はどこに…」

「こっちです」

「つと、どこ行くの!？」

…何か路地裏に連れ込まれた。

一体何を……？

「脱いでください」

.....

.....

「.....はい？」

聞き違い...だよな？

「脱いでください」

聞き違いじゃ……ない？

「いやここで脱げって言われても」

「いいからさっさと脱いでください！いつまでそのパッチワーク着るつもりなんですか！」

「わかった、わかったから一旦後ろ向いてて！」

……着替えてってことか。

〜数分後〜

「こんなところかな？」

「ですね。これで変な目で見られずにすみませす。」

「それただ単に半霊が目立つだけじゃあ……」

「そ、そんなことないですって!……多分」

「多分……まあ行こうか。あとどこ行く?」

「あとは食材ですね。さっさと済ませましょうか。」
「だな。」

少女達買物中……

「さて、じゃあ帰りましょうか。」

「ああ……でも、春なんて無かったな?」

「そうですね……まだ2月ですししばらくないかもしれませんね。」

「それもそうか。」

そして、僕は今晚は肉じゃがにでもしようかと考えながら妖夢と歩いて行った。

第7話 く花咲けどく

「うーん……………」

「どうしたんですか？」

「ああ……………いい加減幻想郷の春も尽きるのにまだ咲き切らないからちよつと気になって。」

「そうなんですよね……………ここ数日はほとんど見つからなくなりましたし……………」

4月も末。

あれ以来1月近く春を集め続け、すこしづつではあるけど西行妖の花が開き、今は七分咲き……………といったところだろうか。

……………だが。

ここ最近、開花速度が急に鈍っている。最初の内は足りると思っていた春も、このままだと地上の分を集めてもまだ足りないかもしれない。

できればやりたくなかったけど、今度から上空の春も回収しないと駄目かなあ……………

正直なところ、上空の春は回収が面倒なのでやりたくない。何か叫びながら弾幕ばら撒いてくのもいるし。

……おつといけない。そろそろ夕食の準備にとりかからないと
……



一方その頃……

—博麗神社—

「……………つくしゆ!寒……」

「まったく…風邪でもひいたか?」

「いたって元気よ!…というか、なんで未だに雪が降ってるのよ!!もう5月になるのよ!?ただの長雪じゃ説明つかないじゃない!」

「だくかくらくこれは異変だっつってんだろ?どっかに春を隠してる奴がいる。そいつを叩きのめす。それでいいじゃないか。」

「そうはいつでも…くしゆん!」

「おいおいいつもの調子はどうした?まさか本当に熱でも…ありや。」

軽く茶化すような調子で魔理沙が私の額に手を当て、そしてやや意外そうな声を上げた。

「……………何よ、いきなり。」

「霊夢、少し熱あるぞ。」

「ええ…もうなんなのよ……」

私も、多少調子が悪いとは思っていたけど……ここまでとは思わなかった。

「ま、2、3日寝てりや治るだろ。私がある間にすぱつと解決してやるからよ！」

「……魔理沙。主犯は私にとっておきなさいよ。」

「さーてそいつはどうかなー？ 私いい加減冬に飽きたし、霊夢が治す前に全部片付けてやるよ。じゃあなー！」

そう言っつて、魔理沙はどこかへ飛んでいった。

「あ、魔理沙！………行っちゃった」

……でも、どうやって主犯を見つけるつもりかしら？ 氷精なんかにはこんな真似出来るはずもないし。

正直なところ、こんなに冬が続いているのに、誰が春を隠したのか見当もつかない状況にか参っていた。

これじゃ、博麗巫女失格ね……今回の主犯見つけたらとつちめてやろうかしら。

でも、少しは安静にしていようか……

私はふたたび布団に潜りこんだ。



「さーて……ああ言ったのはいいけど実際どうしたものかな……」

霊夢に大口叩いて飛び出してきたのはいいんだけど、私自身どいつが雪降らせてるかわかってないが……

「まずはあいつから当たってみるか。」

あの馬鹿のことだ。何もなくとも暇潰しにはなるだろ。

そう思考をまとめ、私……霧雨 魔理沙は霧の湖へ向かった……
はず、なのに。

「…何だこの家？湖の近くにこんなものなかったよな？」

「何か用？」

「猫に用はなんかないぜ。」

「ここは迷い家。あなた道に迷ったんでしょ？」

「もともと道なんか通ってないけどな」

「雪で視界も悪いし、もう帰り道わからないでしょ。」

「帰り道ぐらいわかるわ！」

まったく。人をなんだと思ってるんだ。

こんなところで迷う訳がないだろ。

迷う訳が………

迷う………

………

……………迷った。

湖を目指したはずなのに、いつのまにか森に出ちまった。
森には何も…

「……………お？」

あいつなら何か知ってるか？

「アーーーーリスーーーー？いるかー？」

「……………いるわよ。」

「……………どうした？」

「それは私の台詞よ。しばらく顔も見せないと思ったら……………一体何してたのよ。」

「すまんすまん。ちよつとごたごたしてたんだな。」

「大したことじゃなさそうね。…で？何か用があるみたいだけど何しに来たの？」

「ああ……………ちよつと人探しをしててな。」

「人探し？一体誰を？」

「幻想郷から春を盗んでった奴だ。」

「魔理沙じゃないの？」

「何で私が盗むんだよ！」

「またろくでもない実験に使ってるのかと。……………ま、それはさておき……………春を盗んだ、ねえ……………」

「誰か知らないか？」

そう問うと、アリスは断定はできないけれど、と前置きした上でこう続けた。

「……ここ1、2ヶ月、妙な二人組がうろついてることがあったわ。何かかき集めてるみたいだった。」

「二人組？どんな奴らだ？」

「どんなと言われてもねえ……遠目だったし、人間ではなさそうだったけどそれ以外は何も言えないわね。」

「人間じゃない？じゃあ何だって言うんだ？」

「多分、冥界と関わりがある筈よ。二人とも霊を引き連れてるみたいだったから。」

「冥界だな？じゃあそこに行けばいいわけだ。」

「……大丈夫？」

「大丈夫だって。じゃあな！」

「あつ……」

……アリスは何が言いたかったんだ？

まあ、後で聞けばいいか。

そうして、私は冥界へ向かうべく飛び出して……

「魔理沙!!!」

「霊夢!?お前風邪は大丈夫なのか？」

「試作薬だとか言って押し付けられた奴飲んだら治ったのよ」

……あれ？私そんなの渡したか？

「で？誰がやったかわかったの？」

「……あ、ああ。どうやら冥界の奴らが遣ったらしいぜ。」

「……冥界ね？じゃあさっさと行くわよ。」

「ああ……っつてちよっと待てっつて！」

急いで霊夢の後を追う。

……冥界の行き方知らなかったなんて言えねえな。

第8話

く招かれざる客く

僕は、暗闇の中にいた。

……………どうしてお前だけが……………

……………いくら直系とはいえこんな若造に……………

……………本当はこいつがやったんじゃないのか……………

……………こいつに遺産をやるぐらいならいつそ……………

何も無い空間から声だけが聞こえる。

「……………やめろ」

呻くような声は闇に吸い込まれ、また気味悪い反響だけが届く。

……そうか。

如何なる抵抗も無駄なのか。

ならばいつそ、全てを隔離すればいい。

たとえ全てを失ってもいい。

もう何もいらぬ。

ナニモ……

「……………！」

目が覚めた。

呼吸を整え、心を落ち着ける。

どうにか気分を落ち着かせ、井戸にでも行こうかと思い立ち、中庭に出た。

井戸の水を桶に汲む。すると、桶に映った僕自身の像に不意に問いかけられたような気がした。

いつまでそう名乗るつもりなのか？

その問いに対する答えは……………

出せなかった。

実際、今の僕はこの名を名乗る必要もない。
では何が僕をそうさせるのか。

答えを出せないまま、朝食の仕度に向かった……………

〈昼食前〉

「じゃあ妖夢呼んでくるからしばらくここを頼む。」
(承知した)

昼食の用意がもうじき終わるのに、大階段周りの手入れに行った妖夢が戻って来なかった。

もしかしたら妖夢に何かあったかもしれない。それに、妖夢にならあのことを話せるかもしれないと思い、僕が妖夢を捜しに行くことにした。

「それにしても、何やってるんだ……ん？」

大階段の方から奇妙な二人組がやってくるのが見えた。いや、二人組のうちどちらか片方だけならあまり奇妙には思わなかったかもしれない。でも、巫女と魔法使いという全く関係の無さそうな組み合わせを、このまま放っておく訳にはいかなかった。

「何か用か、その赤いのと黒いの。」

「……？誰だお前」

「ここの料理番だ。今日客人が来るなどとは聞いておらんのでな。お引き取り願おう」

「…何？ここは客の一人や二人入れることもできないわけ？」

「普段から余分な食材は置かんのぞ。今来られても困るだけだ。」

「春を元に戻せばさっさと帰るんだけどな。」

「春ならもうしばらく借りておくぞ。延滞料もつけておくから待てばよかろうに」

「……霊夢。こいつぶっ飛ばして行くから先に行つてな。」

「……ほどほどにしときなさいよ？」

「そいつは出方次第だな。……さ、どうする？」

「どう……？なら、さっさとお帰り頂こうか！」

相手の先手をとるべく、ひとまず70発ほどばらまく。

「お前がその気なら………！」

黒服の少女も負けじと打ち返し、たちまち弾幕の応酬に発展した。

僕自身はしばらく通常弾で様子を見るつもりだった……のだが。

「面倒だからさっさと決めるぜ！恋符『マスターパーク』！」
「くっ………」

早々にスペル飛ばしてきやがって……

なら、こちらも1枚出すか。

そう覚悟を決め、光線の延長線上から動くことなく1枚目のスペルを取り出し、宣言した。

「防符『不可視の障壁』」

世界が、光に覆われた。

第9話 桜下の決戦

「……呆気ないな。もう少し手応えが欲しかったけど、あんなひ弱そうなのじゃ無理か。」

次第に薄れる土煙の中に吹っ飛ばされた少年の姿を探そうとした私は、

「嘘……だろ……」

一枚のスペルを掲げ、涼しい顔で浮いている姿を見つけた。

「開始早々大技とは随分余裕だな？なら、そんな余裕を無くすまで

……鏡符『無際限の魔鏡』!!」

そう宣言すると、奴が忽然と姿を消した。

「……………どこに行った？」

「ほら、ここだよ」

「っな!？」

真後ろからの声。

振り向くと3人の少年が弾幕を飛ばしている。

「ええい面倒な!」

3本のレーザーを飛ばし3つの像を撃ち抜く。すると、

「ほらこっちだよ何やってんのさ」

「僕はここだよ」

「残念だったね」

「まだこれからだよ」

「……………どうなってやがる……………」

同じ像が数百浮かび上がってきた。

多過ぎてどれが本体なのか全くわからん。でも早く潰さないところの人数から弾幕来たら避けられるか……………?

「……………さあ、避けられるものなら避けてごらんよ……………」

「面白くなってきやがった!黒魔『イベントホライズン』!!」

互いに数百数千もの弾幕を飛ばし、半数近くは相殺されながら殺到

していった。

当初はほぼ拮抗していた弾幕は、少年の像が減るにつれて魔理沙が優勢になっていった。

「ほらさっきの勢いはどうした？」

「……………」

数百あった像もあと30程度まで減ったしそろそろ当たりを引いてもいい頃合いじゃ……

「痛つ……あれを押しきるのかよ!？」

「何言ってるんだ!弾幕はパワーだぜ?」

「ああよく判ったよ畜生!」

そう叫んで距離を取ろうとする少年を追っていく。さっきまでの考えは完全に捨てて。



「くそつ……まだ追っかけてやがる」

小さく悪態をつきながら一旦空中で振り向き、3枚目を取り出した。

「炎符『火焰乱舞』!!」

炎を模した弾幕が飛び、二重三重に環を形成していく。環が十分広がったところで順次第二幕に移行、内向きに5く6分割しながら螺旋軌道を描く。

単純ながら密度が高く、かつ中心をずらすことも可能なため極めて難解なスペル……の、筈だったのだが。

「おい、その程度か?」

「…………ま、間が広すぎただけだ!」

一度距離を取ったために遠距離に弱いという欠点を晒しただけに終わってしまった。

「距離ぐらい考えてやれつての!恋風『スターライトタイフーン』!!」
そうして繰り出された弾幕は、ただ星弾を三方に撒いているように

しか見えなかった………ほんの5秒ほどの間だけ。

「な……ちよおっ!？」

星弾から放たれるレーザーを咄嗟にかわす。

だが、かわしたその先にまたレーザーがある。

「あ………」

もう避けられない。

そう判断した僕は、咄嗟に霊を盾代わりに往なす。

霊と光が交錯した瞬間……

「ぎ……あああああっ!？」

焼けつかんばかりの衝撃が走る。霊を突き抜けてきたのか或いは霊の感覚が伝わってきたのか、そんなことを気にかけることもしていられず、残る札の片方を取り出し一行の言葉を絞り出す。

「反射…『リフレクソロジーの応用』……っ」

宣言と共に光の束から隔離される。

ゆっくりと体勢を立て直し、高らかに宣告する。

「隔絶と屈曲の狂気、とくと味わうがいいさ!!」

「一体何をしようって……!？」

四方八方へ通常弾をばら撒く。一見どうと云うことのない弾幕は、直後あらぬ方向へ跳ね返り致命的難度と化す。相手に見てみれば、いっどこから飛んでくるかわからない上、耐久型であるが故に延々付き合わされる極めて面倒な代物。

「光撃『シユート・ザ・ムーン』!!」

「……………え?？」

……万策尽きたと思っていたのに、スペル使用も辞さないとは。

「……………でも、詰めが甘い」

一度反射位置を調整し、先にスペルブ레이크を起こす。すると今度

こそ打つ手をなくした白黒が立って続けに被弾していく……と、思っていたのだが、

「あっ……」

「やっと終わりか、手こずらせやがって」

2、3発命中したところで時間切れになってしまった。

「さあ、どうする？…まだ手はあるぜ？…それともここで降参か？」

「……………」

まずい。

ここまですべて対処している以上、本当に打つ手があるのだろうか。スペルはあと1枚……でも、こいつを使うのは危険すぎる。仮に倒したとしても、その時僕自身がその場に立っていられるだろうか？ではどうする？通常弾でちまちま攻撃しても効果はないだろうし、今更スペルカードを足すなんてことできるはずが……いや？

以前幽々子様にか言われたよな？確か……

——イメージさえ確立できていれば、何でも生み出せるはず——
そうだ、「何でも生みだせる」のなら、スペルカードもできるんじゃないのか？……いや、でも弾幕と札のどっちをイメージしていけばいいんだ？

「おーいまだかー？」

「…………ちっ」

どうすればいいかさっぱりだけど、もうやるつきやない……!!

「散弾『ショットガンシューター』」

宣言と共に、ありもしない札を取りだす。直後、即席のスペルは半

ば以上暴発し、結果を確認することもできずに後方へ大きく飛ばされてしまう。僕は霊も駆使して地面に叩きつけられないようにするの
で精一杯だった。飛ばされた先のことにも気を向けられないほどに
……

「失敗したか……!？」

ようやく安定を取り戻した時、僕は周囲に溢れる膨大な霊気
の存在に気付いた。僕があたりを見回すと、

「……西行……妖？　でも、何故……?？」

ここしばらく8分咲きのまま散ることもなく屹立していた西行妖。
その大桜から、今朝僅かにしか感じなかった霊気が、いまや少し離れ
てもはつきり感じられるほどになっていた。

「霊気……弾幕……もしかして?？」

何故、さつき暴発したのか。その理由が環境にあったとしたら……
?

札を生成したあの瞬間、周囲の霊気から弾幕を作り出していたな
ら、暴発したことも十分説明がつくし、ここなら問題ない……はず。
旗を巻くのは失敗してからでもいい。

あの少女がほぼまっすぐこちらへ飛んで来るのがみえた。

「…………撃ち落とす」

再び構え、今度はゆっくりと弾幕のイメージを集中させる。そのイメージに応えるかのように気が流れこみんでいく。そして……………

——面倒だ、しばらく借りるぞ——
「なっ…………」

何を、と発することもできず、僕の意識はそこで断ち切られた。

第10話 冥土の妖桜

「……………どこまで飛んでったんだ?」

少年が吹っ飛ばされていった方向を辿っていく魔理沙。
少年の姿を見ないうちに、あるものを見つけた。

「……………ん?」

延々と並び、散ることもなく咲き誇る桜の木々。

その中に明らかにほかと違う1本を見つけた。

「あれは……………」

周囲に数百数千と桜が並ぶ中で、この樹だけは虚空を突かんばかりに聳えていた。そして、その大樹へと幻想郷中からかき集められたであろう春が吸い寄せられていく、異様極まる光景……………

「なるほどな。あれが本命ってわけか」

この時、魔理沙はこの大樹なり妖樹なりから春を飛ばしてしまえば異変を解決できると考え、それを実行しようとした。即ち、1枚のスペルカードを持って大樹の方向へと突進した。その行動は、冷泉によって正確に捉えられており、数秒のち魔理沙の進路のど真ん中を予告線が貫いた。

「なっ……………っつとっつと」

突如現れた予告線に魔理沙はやや驚きはしたものの焦ることなく上方へ待避し弾幕に備えた。だが、予告線が消えただけで、極太のレーザーはおろか1発の弾も飛んでこなかった。

「……………ん?どうなってるんだ?」

「予告線だけの弾幕」というわけのわからない代物に困惑しつつも、ようやく少年が大樹の側に浮いていることに気づいた。

「ま、聞きゃ分かるか」

そう結論付け、一気に突進し少年と再び相対した時、おもむろに少年から口を開いた。

「……………ここまで来たか、霧雨魔理沙」

「……………おい」

魔理沙の表情が険しくなる。この少年は魔理沙の名前を知らないはずなのだ。実際ここまで彼女のことは単に「黒いの」と言っていただけだった。

「なんで私の名前を知ってる？そもそもお前は何だ？何故ここにいる？」

「そう一気に聞くんじゃない。……私は西行妖。お前さんの読みは合っているが、流石にそれをやられると困るのでな」

「なんで知ってるかは答えないか。まあいいさ、後ろの奴を吹っ飛ばすからそこを退きな」

「どうしてもやるといふのか？」

「ああ」

「それが最悪の選択だとしても？」

「……………何が言いたい？」

魔理沙の問いに西行妖を名乗る少年が答える。

「……それはこの桜の封印を解くことがこの異変の目的だからだ。そして、目的が達成されることは何としてでも防がねばならない」

「はあ？お前は私を排除したかったんじゃないのか？達成させたくないならなぜ攻撃してきた？」

「この樹を破壊した時封印もまた破られ、一人の霊体、いや幻想郷の全てに『死』が広がる。それは霧雨魔理沙、貴女も例外たりえない。故に、私は樹を傷つける者に容赦はせぬ」

「ならどうしろってんだ!？」

「それは私に任せてもらおう」

次第に怒りを含んだものになっていく魔理沙の声を意に介さず、少年は話を続けた。

「今ならば私が春を制御出来る。あの樹に取り込まれた物もな」

「今なら……ね。どうせならもっと早くしてもらいたかったんだけどな」

「遅すぎるよりはよかろう？……………ところでだな」

「ん？なんだ？」

「この騒動の始末をつけて終わりというのも癪なのでな。しばらく付き合ってもらおうか」

「……お前、さっきまで散々だっただろうが。またやるのか？」

「あんなものは技量のない若造が己をもて余したに過ぎんさ。……死符『黒死蝶』」

「随分と好戦的だな……!!？」

「今こそ問おう、現世の囚われ人。汝、安樂を望むか」

第11話

千年の記憶、千年の祈り



.....

.....

.....ここは.....？

.....何故世界が緑一色なんだ？

西行妖はどうなった？

妖夢と幽々子様は………？

未だ朦朧とする意識の中でそこまで考えた時、こちらに近づく少女が映った。

憂えげな、というよりどこか思い詰めたような表情を浮かべ、見慣れぬ和装をやや引きずりながらこちらへ歩いてくる。でも何故か僕に気づく様子はなかった。

僕に気づかない……………？

そう疑問を抱いた時、唐突に意識のもやが取れたように感じた、そうして鮮明になった意識を再び少女へ向け……………

……………！

僕ははつきりと感じた。あの少女は間違いなく幽々子様だ……………服装が違うのはあの時先へ行った赤いのと戦ったためだろうか？だとすれば、一体何があったのだろうか。

「幽々子様……………？？」

どういふことだろう。自らの意思に背き、その言葉は意識の域を越えることはなかった。あり得ざる裏切りに困惑する間にも幽々子様はごちらへと歩み、手を伸ばせば届きそうなほどの距離で立ち止まると、衣の内から一振りの飾り刀を取り出した。

あれ、白玉楼にあんな飾り刀あつたつけ。

ふと浮かんだ疑問は、一瞬のうちにそれを上回る驚愕によつて霧散した。

鞘から抜かれた短刀が、幽々子様の首筋を抉った。

幽々子様の身体が糸の切れた人形のように力無く崩れ落ちる。

首筋から溢れる血が胸元まで濡らしていく。

奇妙な体勢で倒れたまま身じろぎすらしないことが彼女が既に絶命していることを物語っている。

僕はその光景をただ見ていることしかできなかつた。

その時だった。

「これで判ったか？」

どこからともなく語りかけてくる声。

「……どこのどいつか知らんが、今ので一体何を判れてんだ。それに、何故声だけで姿を見せない？」

正直なところ前半は半ば虚勢だ。あんなものを見せられたら、よほど鈍感な奴でもない限り幽々子様が死んだのだと——あれが真実だとするならば——嫌でもわかる。

「まだ解らんのか？西行寺幽々子は死んだ。今から一千年前にな。そしてその原因は私、『西行妖』に在る」

「そ、そんな馬鹿な話があるか！そもそもまだ西行妖の封印は解けていない筈だー！」

「然り。私の封印は解けていない。故に貴公の面前に立つことは無い」

「しかしこうやって声は伝えられたじゃないか」

「それはどこぞの阿呆が靈気を奪おうとするからだ。尤も、其奴は自分が何をしでかしたか考えもしとらんようだがな」

「何をつて、黒いのを倒すのに靈気が必要だっただけだ。桜が妖怪だ

なんて知らなかったぞ！元々は西行妖の封印を解いて桜を咲かせようとしたんだ」

「その封印を解こうとしたことを言っているのだ。私を封印しているものが何か知っているのか？」

「何かって、術を使ったんじゃないのか？」

「西行寺幽々子の亡骸だよ」

「……………」

「その様子だと知らなかったようだ。ならもう一つ教えてやろう。西行妖が満開となった時、亡骸は再び地上に現れる。そうなれば幽々子の魂は千年もの時の流れに耐えきれず消滅する」

「……………!!」

「さあどうする？初志貫徹して封印を破るかね？それとも……………」

「……………決まっているだろう」

右も左もわからない中で得られた安寧の地をどうして壊すことが出来るだろうか。

「幽々子様には僕から失敗したと伝えておく。それでいいか？」

「それが良からう。誰も喪わず、傷つけない」

「そうか。……………一つ聞かせてほしい。何故あれを僕に見せたんだ？」

「……………私はただ、千年前の悲劇を繰り返させたくないだけだ。千年前、私は自身の能力を制御できずに暴走し、結果的に多くの人を喪った。能力の多くを封じられて、私は自身の暴走で何かを喪うことが無くなったのだ。私も今更封印を解こうなどと思っってはおらんし、誰かに解かれても迷惑なだけだ……………」

「なるほど。ところで、そろそろ元に戻してくれないか？いい加減にしないとあの黒いのが追いついてくると思うんだが」

「ああ、それならとうに追いついているぞ」

「なんだって？」

「随分乱暴に解決しようとしたのでな、暫く相手してやろうと思った

んだがこれが存外しぶとくてな。そろそろ交代してもらおうと思っ
ていたところだ」

「それはまた面倒な奴だな。……では、僕はこの辺りで元に戻ろうと
思います。この件が片付けばまた話せる機会もありましょう」

「まあそう慌てるな。まだ言うこともあるし、第一、どうやったら戻れ
るか知らぬではないか」

「ぐ……」

言われて見ればそうだった。

「……それで言うこととは何だ？」

「貴様の『能力』のことだ。その能力でスペルを創り出す発想は悪くな
い。だが、独力で靈気を集められない以上、そのままでは幾度行つて
も暴発するのが関の山だろう」

「つまり、最初暴発したのは……」

「左様。さらに言えば貴様自身も極めて不安定な環境に置かれていた
ぞ。だからこうして今話している訳だが」

「つまり、僕の能力でスペルを創るのは不可能ということか」

「そうだ……だが、無駄にするのは惜しいからな」

言うや否や、右目に違和感。

「今何をしたんだ？」

「私の能力の一部を与えた。貴様の言い方に倣うと『気を集め、奪う程
度の能力』とでも呼ばれるだろう」

「つまり、この能力を組み合わせればスペル創造も？」

「まず問題無く出来るだろう。さあ、そろそろ元に戻すでしょうか。
用があったらまた来るといい。与えた能力が媒介するだろう」

「はい。……また参ります」

「ついでに言っておくが、今貴様が名乗っている名の真実はいずれ知
られるぞ。そうなる前に手を打つんだな」

返答する間もなく、再び視界が暗転する。

数秒の闇を経て、乗っ取られた時の逆回しのように突然視界が開けた。今度は身体感覚もあり、金髪の少女がかなり疲弊しながらもどうにか弾幕をかわしきろうとしていた。

「大分派手にやったらしいな。尤も、僕としてもいい加減終幕にした
いんだけど。どうだ？そろそろ終わらせないか？……えーと、黒
魔女さん」

「どうだってな……お前らのせいでこんな鬱々しい処まで来たのにた
だで帰れるか」

「ただって……ここに溜め込んだ春くらいまとめて返すって……言わな
かったか？」

「言っていないな。だいたい、今まで散々お前らに振り回されて、このま
ま決着もつけずに帰るつもりはないぜ」

「決着つける必要は無いんだけどね」

「お前は、な。あいにくと一度始めた喧嘩は最後まで終わらせる主義
だぜ」

「随分と面倒な奴に絡んじやったかな、これは」

「失礼な。別に時間稼ぎしてるわけじゃないぜ」

「これ以上長引かせるわけにもいかないし……」

「決着つけるついでが良いが、」

「さっさと決着つけてやるさ、黒魔女！」

「その『黒魔女』をやめやがれ、料理番！」

互いに通常弾で相手を牽制しながら、少しずつ移動していく。相手は彼女の持つ最大火力のスペルカードを出してくるはず。ならば
.....

「奇想『鏡写しのマスタースパーク』！」

「魔砲『ファイナルスパーク』!!」

スペル宣言自体は殆ど同時だった。だがスペルカードとしての弾幕を創造する分僕のスペルの発動が遅れた。

僕のスペルは彼女が最初に放った「マスタースパーク」の形を真似て最大限の靈力を乗せたものだ、いくらなんでも押し負けるといふことは無いはず。僕は虹色の奔流を押し流し黒魔女を吹き飛ばすと信じていた。

.....だが、2つのスペルのせめぎあいを見てもほぼ拮抗、或いは僕のスペルが若干押されてしまっている。

このままでは相討ちが関の山だけど、今はもう維持だけで限界。成り行きをただ見守ることしかできない。

「中々やるじゃねえか」

「な.....中々.....?」

「これ相手にここまで耐えた奴は久しぶりだぜ。でも、これで終いだ！」

パアアアアン！

何か破裂したような音を生じさせて、僕のスペル弾幕は消滅してしまっただ。

障害を排除し急速に迫る虹色の光。もはや回避不可能.....!!

「ぐ……………おお!？」

直撃を食らってもさほど痛くはない。むしろ問題は高速で弾き飛ばされたせいか結構気持ち悪い。何とかして止まら

「ぶげっ……………ぐい、ううう……………」

止まるんじゃないかった……………何か叩きつけられた上にまたどこかぶつけられたせいで声も出せないほど痛い。衝撃で気絶していた方がいっそ楽だった。

「……………い。おい、聞こえてるかー？」

「……………ああ……………何とか……………」

にゅつと出てきたとんがり帽子と金髪の少女が僕の顔をのぞきこんできた。

「僕の負け……………目的は、達成、したはず……………」

「目的って、何が目的か分かってて言ってるのか？」

「ほら、上を……………」

少女が見上げた先で、西行妖についた花が散っていく。その花びらは光の粒を散らして、どれも地表に積もらずに消えていく。

幻想の桜が散ってゆく。

風変わりな春も、今日限りで終わる。

「……………これで、よかったのか?」

元の枝ばかりになった西行妖からは、何の気配も感じられなかった……………。

「そういや、お前さん名前は何て言うんだ?」

「私? 私は霧雨 魔理沙だぜ。そういうお前は誰なんだ?……………の前に立てるか? 肩ぐらいは貸すぜ?」

「ああ、しばらく貸して……………痛くて仕方ない」

「ほら、掴まりな」

「…………おお痛え。…………で、名前だっけか？」

「ああ」

「……………佐田^{さだ} 清弥^{せいや}。呼び方は好きにすりゃいい」

積もることのない桜吹雪の中を、二人歩いてゆく。

後に「春雪異変」と名付けられる事件が、幕を閉じた。